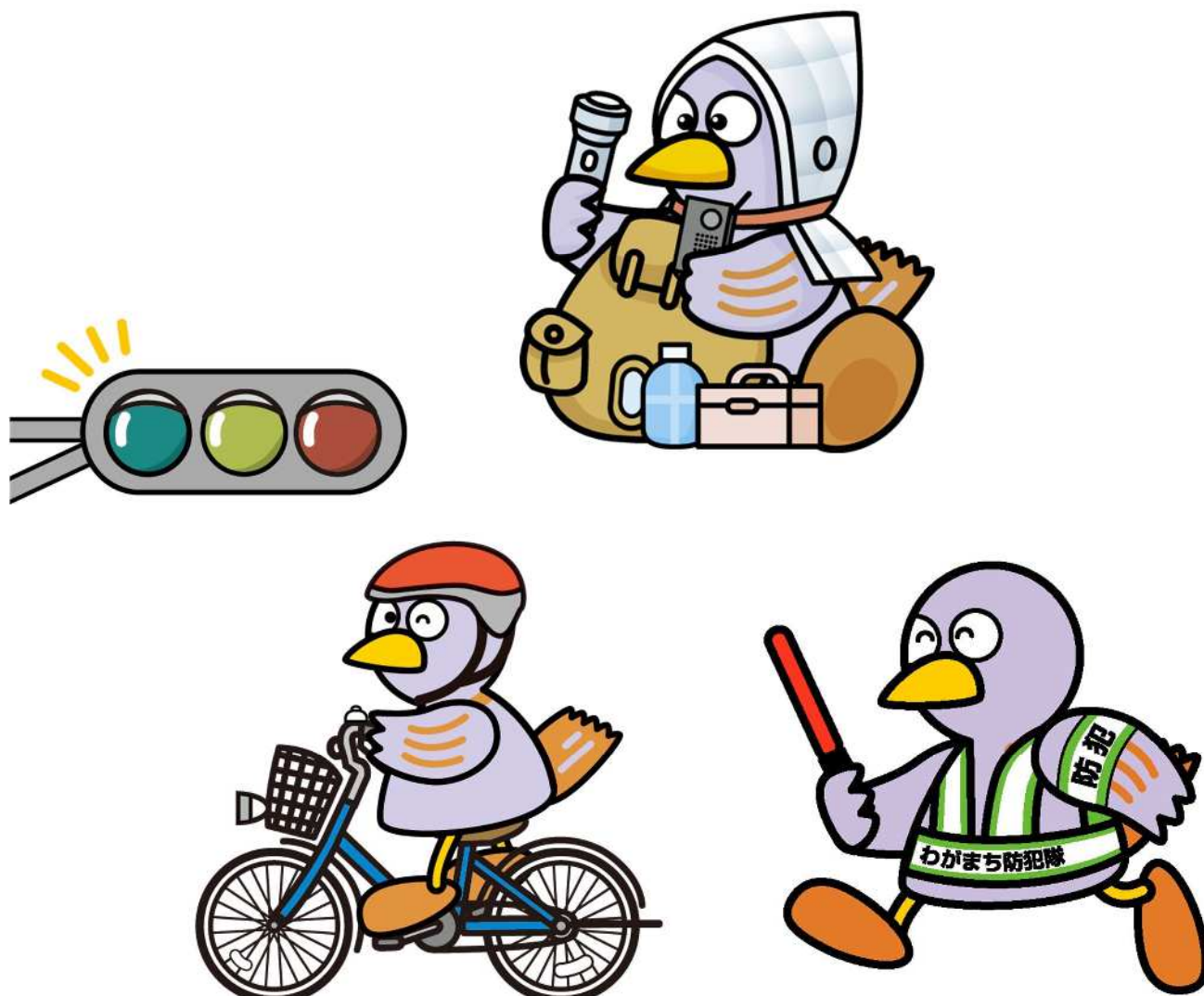


令和6年度「学校安全総合支援事業」

埼玉県成果報告書

児童生徒の「安全に関する資質・能力」の育成を目指して



埼玉県マスコット「コバトン」

令和7年3月
埼玉県教育委員会

挨拶

日頃、本県教育行政施策や諸事業の推進に当たり、格別の御理解、御協力をいただき心から感謝申し上げます。

さて、我が国は、激甚化・頻発化する自然災害のリスクや、登下校中の事件・事故、不審者による犯罪など、子供の安全を脅かす様々な危険が顕在化しております。

自然災害については、令和6年1月1日に能登半島地震が発生し、建物の倒壊や津波の被害などで死者は470人以上となりました。また、8月には「南海トラフ地震臨時情報」が発表されたことは記憶に新しいところです。さらに、阪神・淡路大震災から30年の月日が流れました。過去の記憶を風化させることなく、今後発生が懸念される大規模災害に備え、実践的な防災教育を進めていく必要があります。

交通安全については、一昨年度の道路交通法の改正により、自転車乗車中のヘルメット着用が努力義務となりました。埼玉県の使用率は向上しているものの、依然低い状態が続いております。警察の統計によると、自転車乗車中の交通事故は、高校生の割合が高いことがわかっております。生徒のかけがえのない命を守るためにも、よりヘルメットの着用について普及啓発していく必要があります。

生活安全については、県内において不審者による登下校中の声掛け事案や、校地内侵入等の事案が発生しております。児童生徒が安心して学校生活を送ることができるよう、今年度本県が新たに策定した「第4期埼玉県教育振興基本計画」では、令和10年度までに「警察等と連携した防犯研修・防犯教育を実施している学校の割合」を100%にすることを目指しております。

このような中、本県では文部科学省「学校安全総合支援事業」を受託し、生活安全、交通安全、災害安全の3つの領域について、安全教育の推進に取り組んでまいりました。

本年度は「モデル地域」を戸田市、鶴ヶ島市、吉川市に委託し、それぞれの学校や地域の実情に応じて学校安全の充実・発展に資する実践にお取り組みいただきました。実践にあたり、埼玉県学校安全アドバイザーの皆様にご指導をいただき、モデル地域の3市はもとより、県内各学校での安全教育の一層の推進につなげることができました。

一方、県立学校の生徒に対しては、防災教育として「高校生災害ボランティア育成講習会」を開催し、災害時における学校や地域に対する支援者としての自覚や、安全で安心な社会づくりに貢献する態度の育成に取り組みました。

交通安全教育では、県立浦和東高等学校、県立深谷商業高等学校、県立幸手桜高等学校の3校を「自転車ヘルメット着用推進校」に指定し、生徒や地域の交通状況の実態に応じた実践にお取り組みいただきました。

本事業の推進に当たりまして、学校安全アドバイザー及び県推進委員の皆様、そして、モデル地域の戸田市、鶴ヶ島市、吉川市の各教育委員会及び拠点校、自転車ヘルメット着用推進校、関係の皆様にご改めて感謝申し上げますとともに、埼玉県の学校安全に関する取組がさらに充実・発展することを期待し挨拶といたします。

令和6年度「学校安全総合支援事業」埼玉県成果報告書

目 次

1	事業概要・事業展開	1
2	事業報告	
◆	戸田市の取組 戸田市教育委員会 戸田市立美笹中学校 戸田市内小・中学校	2
◆	鶴ヶ島市の取組 鶴ヶ島市教育委員会 鶴ヶ島市立藤小学校 鶴ヶ島市立藤中学校	5
◆	吉川市の取組 吉川市教育委員会 吉川市立吉川小学校 吉川市立北谷小学校 吉川市立南中学校	8
◆	高校生災害ボランティア育成講習会報告 県立幸手桜高等学校	11
◆	自転車ヘルメット着用推進校実施報告 県立浦和東高等学校 県立深谷商業高等学校 県立幸手桜高等学校	21
◆	高校生の自転車安全運転推進講習会報告	24
3	講演資料	
◆	「児童生徒理解・教職員チームビルディングとしての防災訓練」 慶應義塾大学環境情報学部准教授 大木 聖子 様	25
4	埼玉県推進委員会推進委員及び学校安全アドバイザー等一覧	35

令和6年度埼玉県学校安全総合支援事業

○ 事業概要

児童生徒を取り巻く多様な危険を的確に捉え、児童生徒の発達段階や学校段階、地域特性に応じた取組を全ての学校種において推進する必要性がある。また、家庭・地域との連携・協働をはじめ、学校安全の推進に関し、地域間・学校間・教職員間に差があるとともに、継続性が確保されていない状況が見られるという指摘があり、全ての学校において、質の高い学校安全の取組を推進していくことが求められる。

- ①これまでに蓄積した防災をはじめとする先進的取組を踏まえながら、継続的で発展的な学校安全に係る取組を地域が一体となって推進する。
 - ②学校安全の組織的取組、外部専門家の活用、学校間の連携をはじめ、地域の学校安全推進体制の構築を図る。
- など、地域や学校の抱える学校安全上の課題に対して、積極的に取り組む地域や学校を支援する。

○ 事業内容

- モデル地域・拠点校を中心とした学校安全推進体制の構築のための支援事業（研究授業や避難訓練等への支援・アドバイザー派遣）
- 災害ボランティア活動推進事業
- 交通安全に関する自転車安全運転推進・支援事業

○ 埼玉県推進委員会の設置

- 有識者、県消防協会、教育事務所、市町村教育委員会、気象台、県警本部職員、県危機管理担当者、県立学校長等で構成
- 学校安全アドバイザーの派遣、取組支援（授業や訓練の支援・情報提供等）、効果の検証、成果発表会の実施等

拠点校を中心とした取組の充実（小・中学校で実施）

- 県は実施を希望する市町村教育委員会に再委託をする。
モデル地域：戸田市、鶴ヶ島市、吉川市
- 市町村教育委員会はモデル地域と拠点校を設定する。実践委員会を設置する。
- ・学校安全計画を見直すサイクルを確立する。
- ・リスクを想定した危機管理マニュアルの作成・見直しを行う。
- ・指導時間の確保等、学校における教育手法の改善を図る。
- ・中核教員の校務分掌の明確な位置付け、研修・訓練の充実を図る。
- ・地域の災害リスクを踏まえた実践的な防災教育の充実と関係機関との連携強化を図る。
- ・学校と地域との連携・協働の仕組みを活用した学校安全の取組を行う。等

学校安全アドバイザー派遣（県が委嘱）

- 安全に関して専門的な知識を有した関係者を「学校安全アドバイザー」として県が委嘱し、拠点校に派遣する。
- ・アドバイザーは、有識者、熊谷地方気象台職員、県警本部職員とする。
- 学校安全アドバイザーの業務
- ・研究授業や避難訓練等、教職員研修に対して指導・助言にあたる。
- ・学校と地域の関係機関等との連携体制の構築を図る。

災害ボランティア育成講習会（県立学校を対象に実施）

- 支援者としての自覚や、安全で安心な社会づくりに貢献する態度を育成する。
- 災害時において共助のために率先して行動する生徒を育成する。
- ・15校程度の生徒及び教員を対象に実施。
- ・ボランティア活動について、避難所設置等に関する講習を実施する。
- ・県防災学習センターを利用する。

交通安全教育事業（県立学校を対象に実施）

- 「自転車ヘルメット着用推進校」3校による実践
- 「自転車安全運転推進講習会」の実施
- ・スクエアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教育を実施する。
- ・高校生の交通安全教育講座を実施する。
- ・3会場での自転車安全運転推進講習会を実施する。

期待される成果

- ・児童生徒等の安全に関する資質・能力を育むための系統的・継続的な学校安全推進体制の構築
- ・学校安全アドバイザー等の専門的知見を活用した学校安全に係る取組の質的向上
- ・支援者としての自覚を促し、安全で安心な社会づくりに貢献できる高校生の育成
- ・教職員等の安全教育、安全管理に関する知識の習得や実践力の向上

事業展開

○ 学校安全に関する事業展開

【埼玉県教育振興基本計画】 基本理念：豊かな学びで未来を拓く埼玉教育
基本目標Ⅵ「質の高い学校教育のための環境の充実」～子供たちの安心・安全の確保～

- モデル地域
- 戸田市、鶴ヶ島市、吉川市の3モデル地域で実施
 - モデル地域内で小・中学校を拠点校に指定

- 推進委員会
- 大学関係者、消防関係者、教育事務所、市町村教育委員会、気象台、県警本部職員、県危機管理担当者、県立学校長等で構成
 - 学校安全アドバイザーを委嘱、モデル地域に派遣
 - 間接的なボランティア活動の取組の推進と開発
 - 実施市町村の成果の取りまとめ
 - 各事業の効果検証及び成果発表会の実施

- 災害ボランティア育成講習会
- ボランティア活動についての講義、演習、防災に関する実習等の実施により、災害時において率先して「共助」のために行動できる生徒の育成
 - 埼玉県防災学習センターにおいて、県立学校の生徒を対象に実施

県立高校

- 生徒の交通安全に関する資質・能力の育成
・「自転車安全運転推進講習会」の実施と各校での伝達
- 安全で安心な社会づくりに貢献する資質・能力の育成
・支援校を中心とした「救急救命に関する講習会」の実施
- 「共助」のために率先して行動する資質・能力の育成
・「高校生災害ボランティア育成講習会」の実施と各校での伝達

モデル地域の市町村・拠点校

実践委員会（市町村設置）の開催

- 実践委員会
- ・市町村教育委員会、拠点校、PTA、消防関係者、学校安全アドバイザー等で構成
 - ・取組内容についての検討
 - ・関係機関との調整
 - ・モデル地域の学校安全計画や危機管理マニュアルの見直し・改善
 - ・中核教員の資質向上についての研修

学校安全アドバイザーからの指導

- ・系統性・継続性を意識した学校安全計画や指導計画の作成
- ・学校危機管理マニュアルの改善
- ・教職員を対象とした研修会や安全教育授業研究協議会
- ・PTA、地域との連携体制づくり
- ・学校安全計画や危機管理マニュアルに基づいた合同避難訓練の実施

学校安全アドバイザーからの指導

- ※実践委員会での効果検証
※モデル地域での実践の共有・普及

令和7年1月8日・推進委員会による各種取組の効果検証

令和7年1月14日・成果発表会の実施（全県への普及）

事業報告書の作成・配布

児童生徒の「安全に関する資質・能力」の育成





戸田ヶ原自然再生キャラクター

<とだみちゃん>

令和6年度 学校安全総合支援事業報告

戸田市の取組

戸田市教育委員会
戸田市立美笹中学校
戸田市内小・中学校

1 戸田市の概要

戸田市は埼玉県南東部に位置し、荒川を境に東京都に隣接しているため、都心へのアクセスもよい。緑や公園の数は都市部の市では県内トップクラス、住みよさランキングでも上位に入り、県内一若い街である。

また、1964年に開催された東京オリンピックでボート競技が行われ、日本で唯一のボート競技専用コースがあり、各団体のボート練習場として、また、市民の憩いの場として親しまれている。

市内には市立小学校12校、市立中学校6校があり、各学校の代表からなる安全教育部会を設置している。

本市では平成14年度に「子どもの安全を守る日推進委員会」を設置し、毎年6月8日を「子どもの安全を守る日」に設定。学校・家庭・地域が一体となって子どもの安全を守るための取組を継続して実施してきた。

しかし、令和4年3月、本市の中学校に不審者が侵入し、教師が切りつけられるという事件が発生。その後、該当校だけではなく市内小・中学校の不審者侵入防止マニュアルの見直し、警備員の配置、職員玄関のオートロック化などの取組を進めてきた。

本事業を進めることでさらに、各学校が改めて学校安全について見つめ直すとともに、児童生徒や教職員が安心・安全に働ける環境づくりのために、高い安全管理意識を教職員一人ひとりが持つことができると考えている。

2 戸田市の取組について

(1) 目的

教職員一人ひとりが学校安全・危機管理に関しての重要性を見直し、高い安全意識を持ち続け、児童生徒や教職員が、安心・安全に学び、働ける環境を構築する。

(2) 組織

戸田市教育委員会指導主事 戸田市安全教育研究部長・副部長・部員
モデル校12校のうち拠点校4校
外部アドバイザー（園田学園女子大学 准教授 山崎 雅史 氏）

(3) 実践・取組

ア 実践委員会の実施（4月、8月、12月実施）

各学校の安全主任で組織する安全研究部会を今年度は実践委員会として設置した。

本事業での取組として

- ・セーフティープロモーションスクールの視察から学んだことを情報共有した。
- ・不審者対応訓練の在り方や不審者対応に関する授業づくりを各学校へ広めていくことを意識しながら研究を進めた。

イ 子どもの安全を守る日（6月8日）

6月8日を「子どもの安全を守る日」として各学校で幟旗を掲揚した。

また、学校だより、Facebook などをとおして児童生徒・保護者・地域に周知することで学校、保護者、地域が一体となって子供を守ることの重要性を確認できるようにした。



ウ 不審者対応訓練の実施

各学校において、不審者対応訓練の実施を行った。

訓練の内容は学校の実態、児童生徒の実態に合わせたものとなった。



エ 先進校視察（10月2日）

セーフティープロモーションスクールである大阪大学附属池田小学校へ安全部部長、副部長、拠点校4校の教職員、担当指導主事の7名で視察に行き、不審者対応について学ぶ機会を得た。

短期的な取組、中期的な取組といった視点から市内各学校に情報共有を行った。

短期的取組


○来校者に関する安全規則

- ・ 外部の人を意図した声かけ風土づくり
- ・ （「ＩＤカードの着用ありがとうございます」「どちらに御用ですか？場所わかりますか？」等）
- ・ IDカードのストラップの色で関係者を把握

（例 教師 青 保護者 黄色 外部 赤→保護者がIDカードを忘れたら外部用の黄色のストラップとなる。他の保護者と色が違うことで、忘れることを恥ずかしいと思い、IDカードの重要性を意識する）

○教室環境

- ・ 教室の扉は基本的に開放する
- ・ 荷物を高く積み上げたり、ベランダ出入口をふさがない
- ・ 児童の机の横に荷物をかけない
- ・ 1メートル定規を出入り口近くに置いておく



オ 授業研究会の開催・情報の共有化（12月18日）

拠点校である美笹中学校において、園田学園女子大学 山崎雅史准教授を指導者にお迎えし、「不審者にあってしまったら、どう行動すればいいのか」を考え、自ら判断し、身を守ることができる児童生徒の育成を目指した。

本授業を行うにあたり、オンラインで打合せを行い、小学校低学年、小学校特別支援学級、中学校特別支援学級で先行授業を実施した。

協議会では、「児童生徒が“自分事”として防犯意識を高められる授業デザインとは」を柱として、防犯への理解を深め、主体的に防犯について考える授業づくりについて協議をした。



カ 市内全校で授業実施



先行授業や授業研究会でいただいた御指導を受け、各学校で実践委員が中心となって授業を実施した。児童生徒の実態を見ながら授業づくりを行ったことで、「安全な場所・危険な場所の認識・未然防止のための行動や備え」について、児童生徒自らが考えるきっかけとなった。

キ 安全マニュアルの見直し

不審者に対応するために職員玄関のオートロック化を進めているが、それを踏まえた「三段階のチェック体制」を再度確認した上で各学校において作成している安全マニュアルを見直したことで「危機管理意識」を高めることができた。

3 成果と課題について

(1) 成果

- ・外部アドバイザーを講師として招聘した不審者対応に関する研究授業や先進校の視察を通じて、教職員の危機管理意識を高め、学校の安全教育をより一層推進することができた。
- ・各学校で不審者対応訓練を実施したり、授業を行ったりと実践的に学ぶことで児童生徒の防犯意識向上の一助とすることができた。
- ・実践委員会で各学校の現状や取組を情報交換する機会を設けたことで、今までなかった横のつながりの中で安全教育について考えを深めることができた。

(2) 課題

- ・「授業を通しての学び」と「安全行動の日常化」を両輪として安全教育を進めていくことができるように、今後も安全部会を中心に取組を進めていく。
- ・「教師の安全意識」と「児童の安全意識」だけでなく、「保護者・地域の安全意識」の向上のため、今後は家庭や地域と連携をしながらの取組を推進していく必要がある。



鶴ヶ島市イメージキャラクター

つるゴン

令和6年度 学校安全総合支援事業報告

鶴ヶ島市の取組

鶴ヶ島市教育委員会

鶴ヶ島市立藤小学校

鶴ヶ島市立藤中学校

1 鶴ヶ島市の概要

鶴ヶ島市の人口は約7万人、小中学生は約4500人である。埼玉県ほぼ中央に位置し、高速道路においては、圏央道と関越道が市内で交わり、2つのインターチェンジを持つなど首都圏の重要な交通の要衝となっている。また、江戸時代から継承されてきた伝統行事として、4年に一度行われる「脚折雨乞」が有名である。

鶴ヶ島市の安全面の特徴は、山や大きな河川がなく、災害リスクが少ないところである。また、「液状化マップ」においても市内全域の危険度は極めて低く、洪水浸水想定区域もごく一部である。

市内には、小学校8校、中学校5校あり、全ての学校にAEDを校舎内に1つ、校舎外に1つ設置している。また、全ての学校に災害用蓄電池や防犯カメラを設置している。避難所になる体育館の空調整備も進んでおり、令和6年度末には全ての中学校で整備完了の予定となっている。

2 鶴ヶ島市の取組について

(1) 目的

- ア 教職員及び児童・生徒の防災意識を高め、主体的に行動できる態度を養う。
- イ 実践的・実効的な訓練を通して、教職員の防災教育における指導力向上を図る。
- ウ 小・中連携による学校安全推進体制を構築する。

(2) 組織

埼玉県学校安全アドバイザー、鶴ヶ島市教育委員会、モデル校

(3) 実践・取組

ア モデル校（鶴ヶ島市立藤小学校）における防災訓練

（ア）8月26日 講義・演習 対象：モデル校教職員

埼玉県学校安全アドバイザーである慶應義塾大学大木聖子准教授を指導者に迎え、より実践的・実効的な防災訓練について講義・演習を実施した。講義では、過去の地震災害で必ず大きな余震が伴うことや高確率で停電になること、阪神淡路大震災以降、倒壊した日本の学校は一棟もないことなど、実際に起きていることに基づいて訓練を行うことの重要性について指導をいただいた。

そこで、これまで行ってきた「発災時はどんな時も校庭へ避難すること」を見直して教室内で待機し、その際に、校舎内での情報共有を円滑に行えるように工夫して実施することとした。

(イ) 11月15日 防災訓練(封筒訓練) 対象：モデル校教職員

参観：市内教職員、市危機管理課職員

8月26日の講義・演習で見た課題を解決し、教職員の防災教育における指導力向上を図るため、慶應義塾大学 大木准教授が提唱する新しい形の防災訓練(封筒訓練)を実施した。

課題解決のために工夫したことは、発災時に、教職員間の連携手段はトランシーバーが有効であると考えたことである。活用した結果、校舎内で起きていることの把握はしやすいが、優先度の低い情報まで入ってしまうため、必要な支援の判断に時間がかかるという課題を発見することができた。

他に工夫したことは、傷病者の運搬では、階段の移動中や余震が起こった際の安全のため3、4人で運搬することが望ましいと考えたことである。これについては、安全に運ぶことができるが、教室内にいる大勢の児童に対応する教職員が不足することが分かった。

本部では、集まった情報を把握するため、ホワイトボードや校舎図、ふせんを活用した。校舎図により傷病者の位置が一目で分かること、ふせんにより傷病者の運搬や状況の変化にスムーズに対応できることなど、効果的な工夫であった。

訓練後は、防災訓練の目的や実践方法等について、元埼玉県学校安全アドバイザーである川越市立砂中学校 墨谷悦史教頭による講義を実施した。

(傷病者の運搬)



(本部の様子)



(ウ) 12月10日 防災訓練(実動訓練) 対象：モデル校教職員・児童

参観：市内教職員、市内PTA会長、市内学校運営協議会委員

埼玉県学校安全アドバイザーである慶應義塾大学 大木聖子准教授を指導者に迎え、児童がいる状態での新しい防災訓練(実動訓練)を実施した。繰り返される余震や傷病者が増えていく様子、先生方の真剣な表情・動きから、児童・教職員ともに緊迫感のある訓練となった。

前回の訓練から見た課題の一つであるトランシーバーの活用方法については、「誰が」「何を」情報共有するかの流れを統一し、必要最低限の情報を本部へ報告することで改善することができた。

研修後の協議では、情報共有の際の指示系統・情報統制の重要性や傷病者の見極めのための共通理解の必要性など、活発な意見交換が行われた。

(傷病者の発見)



イ モデル校(鶴ヶ島市立藤中学校)における防災訓練

(ア) 11月29日 防災訓練(停電訓練) 対象：モデル校教職員・生徒

参加：市内教職員

11月29日16時過ぎ、発災から停電が起こったことを想定した防災訓練を実施した。暗くなる校舎内においては、廊下や階段の足元を照らし安全確保をすることが効果的と考え、ライトを活用して実践した。その結果、安全に落ち着いて校舎内を移動することが可能となり二次災害を防ぐことができた。また、停電時の明かりは、生徒の不安感の解消にも効果的だった。

(足元の照明確保)



さらに、停電により放送機器が使えないことを想定し、全生徒の安全確認が終了した後、校長が各階の教室が見える校舎外へ移動し、拡声器を使った一斉指導・避難誘導を行った。

ウ 小・中連携による防災訓練

(ア) 11月21日 引き渡し訓練 対象：モデル校教職員・児童・生徒

藤小学校と藤中学校において、初めての合同引き渡し訓練を実施した。引き渡し方法は、「教室内待機」による引き渡しとした。小・中学校にこどもがいる保護者は、まず、体力のある中学生を先に迎えに行き、その後、引き取った中学生とともに小学生の弟・妹を迎えに行く流れにした。校舎内の一方通行の誘導や靴のまま校舎内に入るなど、より実践的・実効的な訓練にするために様々な工夫を取り入れて実施することができた。

(中学校での引き渡しの様子)



3 成果と課題について

(1) 成果

ア モデル校における成果

教職員の防災意識が大きく変化した。訓練の目的は「うまくやることではなく、課題を見つけ改善策を考えていくこと」と捉え、教職員が、本気で訓練に挑む姿が見られた。また、本事業を通して、実践的・実効的な訓練へ移行することができた。さらに、地震は同時刻に起こることを考え、小・中合同の引き渡し訓練を実施することができたことは、小・中連携の推進にもつながった。

イ 市内全校における成果

モデル校の訓練には、市危機管理課、市内各学校のPTA会長と学校運営協議会委員、1校につき5名の教職員が参観した。その結果、一度に市内全校の教職員及び学校関係者に防災訓練の考え方を伝えることができ、防災意識の向上につながった。また、本事業を通して学んだことを生かし、防災に係る判断基準や対応を市内で統一した危機管理マニュアルの作成を行うことができた。

(2) 課題（次年度の取組）

今年度のモデル校の取組が市内全校で実践できるよう、市教育委員会として各学校を支援していきたいと考えている。また、発災時に、学校と家庭が共通理解・共通行動をとることができるよう、通知文の作成や学校の取組の周知を検討していきたい。

令和6年度 学校安全総合支援事業報告



吉川市イメージキャラクター
なまりん

吉川市の取組

吉川市教育委員会
吉川市立吉川小学校
吉川市立北谷小学校
吉川市立南中学校

1 吉川市の概要

吉川市は、埼玉県の東部に位置し、千葉県との県境に面している。また、中川と江戸川の大きな二本の川に挟まれており、日頃より水害を意識した防災、減災に取り組んでいる。

本市には、小学校8校、中学校4校の計12校があり、中学校1校と小学校2校で構成された中学校区が4つある。今回のモデル校は、学区内に駅があり、昔から住んでいる方と新たに住まわれている方がおり、地域との連携を強化するのに適した中学校区である。昨年度は、公共施設や市役所が学区内にある中学校区での実施をしており、人口密集地と交通主要地の両方で実践的な防災教育や地域との連携ができれば、市内の他の中学校区にも広げることができると考えている。

2 吉川市の取組について

(1) 目的

地域の災害リスクを踏まえた実践的な減災教育に取り組み、地域と連携を密にし、協働できる学校安全推進体制を構築する。

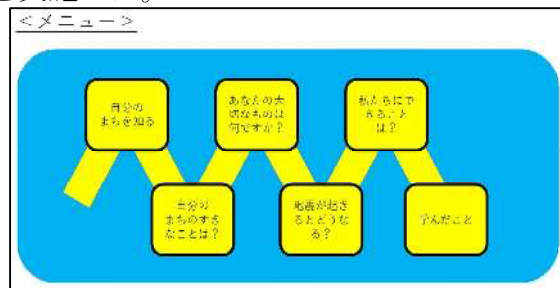
(2) 組織

吉川市教育委員会指導主事、元吉川市危機管理課（現教育委員会副主幹）、モデル校校長及び安全主任

(3) 実践・取組

ア 小学校における減災教育の実施

吉川市の小学校では、減災教育を進めるうえで、「Disaster Imagination Game」の単語の頭文字を取った、DIGを実施した。



小学校における減災教育の目的

「子どもたちが普段、何気なく遊んでいる場所や通学路に潜む危険箇所などを考え、災害時における危険を認識し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに、「自助や共助」について学ぶ。」



イ 中学校における減災教育の実施

吉川市危機管理課と連携し、避難所の開設の手伝いができるよう、生徒たちは、ワンタッチパーテーションの組立、簡易ベッドの組立、災害用簡易トイレの組立、毛布を使った搬送方法の4つの体験を行った。

ワンタッチパーテーションの組立

中学校における減災教育の目的

「災害から自らの命を守るために、一人一人が災害に対する意識を高めるとともに、災害時に自主防災組織等と連携を図り、即戦力となるスキルや知識等を学び、災害対応力を向上させる。」



簡易ベッドの組立



毛布による搬送方法



簡易トイレの組立

ウ 吉川市減災プロジェクトへの参加

吉川市が毎年主催している「吉川市減災プロジェクト」に参加し、地域住民の方々と市との協力体制の確立に重点を置いた実践的な訓練を行った。今年度は、モデル校の南中学校の生徒会役員と北谷小学校の児童が参加し、実際の避難の仕組みについて学び、地域の方と協働して避難所の設営や片付けを体験した。

吉川市減災プロジェクトの目的

「減災意識、水害時避難行動の理解促進及び地域コミュニティによる減災力の向上を図る。」



エ 教頭を対象とした危機管理マニュアルの研修会

毎年新たな視点を取り入れながら、危機管理マニュアルの修正を行うことは、非常に重要である。今年度は、学校安全指導者である吉川市教育委員会副主幹による「大規模地震に伴う帰宅困難者等対策のガイドライン」を基にした研修会を行い、各学校における対応の仕方を統一した。



オ 県学校安全アドバイザーによる安全主任を対象とした研修会の開催

熊谷地方気象台 入福 敏行 気象情報官をお呼びし、気象に関する基礎知識やキキクルの活用方法、吉川市の水害の特徴等について学んだ。昨年度、教頭を対象に行った研修を市内小中学校安全主任を対象に行えたことにより子供たちの安全を守るための視点が吉川市内の教職員へ広げることができたことに大きな意義があった。

安全主任を対象にした研修会の目的
「気象情報の取得方法等の共通理解を図るとともに、校内でも情報共有し、校内の危機管理にいかす。」



カ 江戸川河川事務所による防災教育支援

江戸川河川事務所の方を小学校へゲストティチャーとしてお呼びし、「川が流れている地域で大雨が降り続けると、どのような危険性があるのか？」や、「災害から市民を守ってくれている方々の仕事には、どのようなものがあるのか？」という内容で授業を行った。児童は、大雨の際に気を付けることや正しく情報を得ることの重要性を知ることができた。また、安全に避難するために自分にできることについて、考えることができた。

目的：自然災害から命を守るために、一人一人が災害時において適切な避難行動をとる能力を養う。また、自然災害に関する「心構え」と「知識」を備えた個人の育成を目指す。さらに、子供から家庭・地域への防災知識等の浸透を行う。



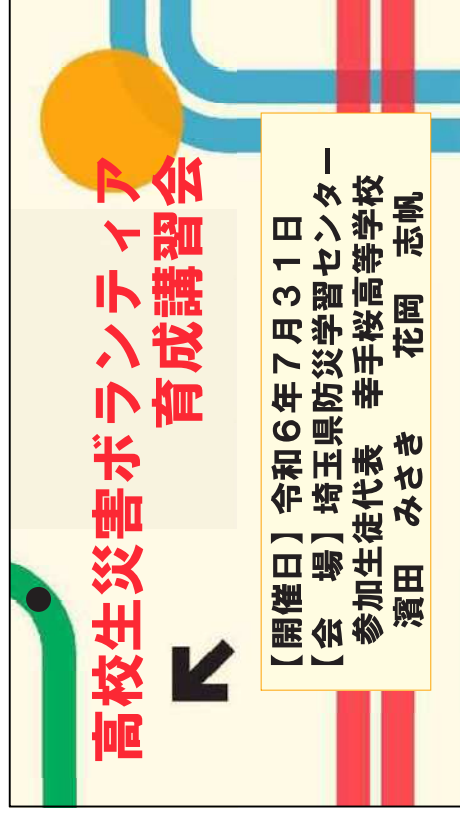
3 成果と課題について

(1) 成果について

本事業を通じて、教職員と児童生徒の災害（減災）への意識を高めることができた。特に昨年度の実践を踏まえ、他の中学校区へ減災教育の取組を広めることができたことにより市内半数の学校で安全教育の推進をすることができた。また、昨年度、管理職が受けた研修を今年度は、各校の安全主任も受講できたことにより、市全体で安全教育をより一層充実できたことがとても大きな成果である。

(2) 課題について

本事業をモデル校のみならず、継続して市内全体に発信することがより一層の安全教育の推進のためには必要である。また、小中一貫の視点を取り入れることにより、各校の実践で終わることなく、小中の繋がりのある実践を行っていくことが次の課題として考えている。さらに、家庭との連携を重要視し、学校と家庭で共通理解、共通行動がとれるように連携を強めていく必要がある。



令和6年7月31日、埼玉県防災学習センターで行われました「高校生災害ボランティア育成講習会」の報告をします。
 参加生徒代表 県立幸手桜高校 濱田みさき、花岡志帆です。
 報告の中では、「みさきちゃん」「志帆ちゃん」でわかりやすいように会話形式も盛り込みます。



報告内容は次の通りです。

- ・避難所運営実習「HUG」
 - ・防災センターの施設について
 - ・避難所開設について
 - ・自衛隊のライフハックについて
 - ・消防団活動の情報提供について
 - ・講習全体を通しての感想
- 最後に、本校で取り組みだ防災学習も報告します。

K 1 避難所運営実習「HUG」

H: Hinanzyo 避難所

U: Unei 運営

G: Game ゲーム

意味は

抱きしめる



はじめに、避難所運営実習「HUG」についてです。
「HUG」は、H→避難所、U→運営、G→ゲームの略で、
「抱きしめる」という意味があります。

K 1 避難所運営実習「HUG」



ゲームを通して避難所の
運営を学びました。

たくさん
悩みました！

性別や国籍等、それぞれの避難者が抱える事情が記載されたカードを、避難所に見立てた平面図に適切に配置できるか、避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。
実際にゲームを進めていくと、避難所の駐車場の配置設定等で、思うように進みませんでした。
限られた時間を十分に使い、避難者が抱える事情をもとに班で話し合い、HUGに取り組むことができました。

K 2 防災学習センターの施設「地震体験」



日頃から地震に対する意識を身に着ける大切さと家の中でも安全に逃げられるように家具の配置や収納の重要性がわかりました。

防災学習センターの施設「地震体験」で、震度の揺れを体験しました。日常で起こる小さな地震には慣れていましたが、自分たちが想像していたものと同じ、手すりにつかまって強い揺れに耐えることしかできませんでした。体験中に流れていた映像では、物や建物が倒れたり、崩れたりしていました。そのような状態の中で避難する大変さがわかり、災害時に備える意識の重要性を実感しました。

K 2 防災学習センターの施設「消火体験」



「消火体験」では、実際に訓練用の水消火器を使って、スクリーンに映しだされた火を消しました。初めて消火器を使用しましたが、ピンを抜いてホースを伸ばし、火元に向けてレバーを強く握るという操作方法は、とても簡単でした。一人で解決せずに、大声を出したり、消防署に電話をするなど、周りに協力を求める大切さも学びました。

K

3

避難所開設「ダンボールベッド設置」

個人では、組み立てられないので共同作業が必要

避難所開設「ダンボールベッド設置」についてです。
 この作業は比較的簡単に行うことができますが、相手とコミュニケーションを上手にとると、より開設する時間を短縮できると思いますが、実際、災害時に開設する際にはお互いの不安を解消できるのではないかと考えました。
 また、個人では組み立てられないので、共同作業が必要となりコミュニケーションをとる大切さを学びました。

K

3

避難所開設「ダンボールベッド設置」

ダンボールは三層になっており丈夫で、組み立てることに
 よってより頑丈になります。
 組み立てが終わる、実際に寝転がってみると、想像していた
 大きさよりも大きく、圧迫感がありませんでした。
 また、パーテーションやベッドの配置によってプライバシー
 の確保や感染症予防にもなり、使い次第でもとても便利で重
 要なものだと思いました。

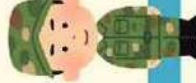
4 自衛隊のライフハックについて



「自衛隊のライフハック」についてです。いざという時に役に立つ工夫や知恵を学びました。
身近にあるもので担架を作る方法や、ブルーシートと新聞紙で寒さをしのぐ方法、スマホのライトでランタンのように明かりを広げる方法、缶切りなしで缶詰を開ける方法、濡らしたくない衣類の保管方法を学びました。

4 自衛隊のライフハックについて

災害・事故直後 防災意識が高まる
月日が経つと 危機感が薄れる



災害に対して強い危機感を持って日々の生活を
過ごし積極的に訓練に参加し非常時に備えられる
知識と知恵を身に付けていきたいと思いました。

私たちは災害直後は防災意識が高まりますが、月日が経つと危機感が薄れていきます。あまり危機を感じていない状況で、普段防災訓練などに参加している生徒が多いと感じました。今回の講習を受け、災害に対して強い危機感をもって日々の生活を過ごし、積極的に訓練等に参加し非常時に備えられる知識と知恵を身に付けていきたいと思いました。

K 5 消防団活動の情報提供について

「自分の街は自分で守る」

- 地域密着型
- 要因動員力
- 即時対応力

災害発生時 平常時

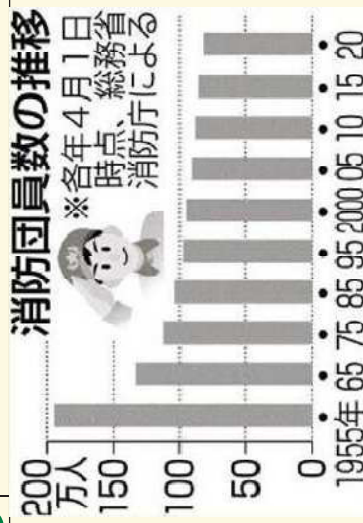


最後に、消防団の活動について学びました。

消防団には、地域密着型で要因動員力と即時対応力があります。また、所属している消防団員は、平時は仕事をもち働いている方が、火災などの際には駆けつけ消火活動を行う、非常勤の特別職公務員です。

災害発生時には、災害現場での消火をはじめ、避難誘導などにあたります。また、平常時には応急手当の普及指導なども行っています。

消防団員は、普段は生業をもちながらも「自分の街は自分で守る」という精神に基づき、災害発生時に活躍しています。



この表は、消防団員数の推移です。近年の消防団員数は減少していることがわかります。
なぜだと思いませんか？

めて(お)志帆ちゃん、なぜだと思う？

帆) 仕事と両立が難しい点や、消防団の存在を知らない、ということが挙げられるみたいだよ。

そんな課題を解決するために、消防団活動の体験イベントの開催や、現役の消防団員へのインタビューなどを情報発信して、遠い存在から近い存在にすることや、音楽隊がイベントを行い、消防団に興味をもってもらうと取り組んでいます。いつどこで災害がくるのかわからないので、消防団が開催しているイベントに参加し、必要な知識を身に付けられるように興味をもつ大切さを学びました。

K

5


消防団活動の情報提供について「インタビュー」

Q.消防団員としてやりがいを感じる瞬間は？
A.「**ありがとう**」「**お疲れ様**」など声をかけてもらうとき

Q.これまでの活動で1番印象に残っているエピソードは？
A.様々な形で**広報活動**を行っていること

Q.自分自身の成長を感じるときは？
A.知識・知恵がつき**日常生活の見方が変わる**

Q.未来にどのような期待を抱いていますか？
A.つながりを持ち**災害時に自助・共助・公助が成り立つ**



私たちは講習会後に、県民の消防防災思想の普及啓発を行っている「埼玉県消防協会」に、インタビューに行ってきました。

Q.消防団員としてやりがいを感じる瞬間は？

A.「ありがとう」「お疲れ様」など声をかけてもらうとき

Q.これまでの活動で1番印象に残っているエピソードは？

A.様々な形で広報活動を行っていること

Q.自分自身の成長を感じるときは？

A.知識・知恵がつき日常生活の見方が変わったとき

Q.未来にどのような期待を抱いていますか？

A.つながりをもてば、災害時に自助・共助・公助が成り立つ

K

6

講習全体を通しての感想

自助

共助

公助



みさき) あたり前ですが、「自助」が大切だと思いますか？

志 帆) 自分のことができないと、他の人を助けることはできないよね。

みさき) 例えば、日頃からハザードマップを調べたり、防災グッズを備えたりすることができよね。

志 帆) 自分のことができれば、他の人に声をかけることができるよね。

みさき) 講習会に参加して、私たちが縁の下の力持ちになれるんじゃないかなと思ったよ。

志 帆) 若い世代は行動力があるし、「共助」の主体になれる力があるって自信がついたよ。

みさき) 自分たちも今回の講習会で学んだことを活かせるように、行動を起こしたり、周りの人に情報を発信していくなど、進んでやってみようと思ったよ。

志 帆) 「自助・共助・公助」のバランスが大事だと思いました。

K 7 ①総探での防災学習「クロスロードゲーム」



**みんな積極的に話し合いをして
取り組みました。**

県立高校は県内に137校ありますが、そのうちの37校が「防災拠点校」に指定され、災害時の避難施設としての整備が行われています。防災拠点校のうちの1校が、私たちの通っている幸手校高校です。

そこで「総合的な探求の時間」の授業で、防災について取り組みました。まず最初に、クロスロードゲームをしました。様々な時と場合を考え、お互いに意見交換をし、周りのコミュニケーションをとりました。また、反対意見が出た場合でも、とらえ方を変えて、様々な見方があり正解はないと思います。クロスロードを通じて防災の意識が芽生えたと思います。

K 7 ②総探での防災活動「自衛隊ライフハック」



レジ袋を使った三角巾

寝袋

スマホを使った痴漢撃退

また、講習会で自衛隊の方から教わった「ライフハック」をみんなで作ってみました。「ライフハック」では、身近にあるもので災害時でも簡単に対応できる方法を学びました。レジ袋を使った三角巾、ブルーシートを使った寝袋、スマホのライトを使った痴漢撃退、

K 7 ②総探での防災活動「自衛隊ライフハック」



毛布を使った担架



二人一組でのけが人移動



自衛隊体操

毛布を使った担架、二人一組でけが人の移動の仕方、自衛隊体操などを行いました。

K 7 ③総探での「ポスターセッション」



最後に、全クラスで班ごとに防災に関するポスターを考え発表をしました。非常食、防災グッズ、登下校中の学校から駅までの危険箇所調べなど、全部で24のテーマで探究活動を行いました。

K 7 ③総探での「ポスターセッション」



ポスターセッションの発表会では投票の結果、救助犬についてのポスターが選ばれました。災害時には、人だけではなく救助犬も協力していることを知り、視野が広がりました。

みさき) 志帆ちゃんにとって、防災とはなんですか？

志 帆) 「防災とは日ごろから意識して取り組むこと」です。

みさきちゃんにとって、防災とはなんですか？

みさき) 「みんなで助け合う習慣を付けること」です。

今回の講習会に参加したことで、防災を自分事としてとらえるようになりました。参加・体験してとても良かったと思っています。講習会にかかわった、すべての方に、感謝します。また、講習会の後日に、埼玉県防災学習センターと埼玉県消防協会の方々にインタビューをさせていただいたことにも、たいへん感謝しております。ありがとうございます。

自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立浦和東高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 926 人（男子417人 女子509人） 職員数 75 人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要</p> <p>本校周辺には、東北自動車道と平行し、交通量が多い122号線が隣接しているなど、危険個所が点在している。公共交通機関の便も悪く、全校生徒の87%が自転車を利用している。また、近くには、私立高校もあり、朝の登校時間帯は、両校生徒の自転車が入り混じり、常に交通事故の危険性を感じつつ、日頃から自転車での交通ルールやマナー指導を行っている。</p> <p>今年度の自転車乗車中での車との接触等、届け出のあった事故件数は13件と、幸い重大事故にはなっていないが多発している。雨天時でのスリップ等の自損事故等軽微な事故も含めると30件近くになると思われる。</p> <p>本校のヘルメット着用率は、7月の段階で3.3%、現在は9.6%と多少増加傾向ではあるが、まだ低い状況である。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践</p> <p>(1) 昨年度までの取組</p> <p>ア 生徒指導部でヘルメットを30個購入、生徒に対しレンタルを開始</p> <p>イ 生徒会から全校集会を利用し、全校生徒への呼びかけ</p> <p>ウ「埼玉スタジアムクリテリウム2023」での啓発活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県警察、保健体育課と連携しブースによる啓発活動 ・プロサイクルロードレースチーム（さいたま那須サンブレイブ）とのコラボによるステージ発表 ・生徒会を中心とした啓発動画作成（ステージ発表使用） <p>(2) 「自転車ヘルメット着用推進校」としての取組</p> <p>ア 教職員に積極的にヘルメットを着用するよう周知 →教職員着用率100%</p> <p>イ 貸与ヘルメット40個の効果的な利用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有志部活動で着用、啓発活動に協力 ・引き続き生徒に対し、レンタル実施 <p>ウ「スケアード・ストレート教育技法」の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自転車ヘルメット着用推進校」の取組として、テレビ埼玉取材（「いまドキッ！埼玉」教育情報番組）→1/25放映 <p>エ 引き続き、生徒会から全校生徒への呼びかけ</p> <p>オ 来年度から、「生徒心得」にヘルメット着用の明記を検討</p> <p>3 成果と課題</p> <p>「自転車ヘルメット着用推進校」としての取組を通し、ヘルメット着用の必要性及び有効性についての意識は向上している。しかしながら、周りが着用していないなどの理由で着用を躊躇している生徒も少なくない。今後は、学校全体で、着用することに対し抵抗がない環境づくりに向け、保護者及び県警察等関係機関と連携した取組が不可欠と考える。</p>




自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立深谷商業高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 812人 職員数 80人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要</p> <p>本校は国道17号の交差点に面しており、交通量が大変多く登下校には注意を要する。生徒の通学方法について、自宅から学校まで自転車を利用する生徒の割合は54.7%、駅から学校まで自転車を利用する生徒は、21.7%であり、620名の生徒が通学時に自転車を用いており、バイク通学者は2名である。登下校中の交通事故数は令和5年度が15件、令和6年度は18件と増加傾向にある。また、自転車ヘルメット着用率は、令和5年度3.7%であったが、普及促進の結果、令和6年度は10.2%まで向上した。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践</p> <p>(1) 本校独自で実施している取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ア 校門での登校指導（毎月初め） イ 交通安全講話（6月） ウ 自転車点検（5月、11月） エ PTAとの合同交通安全指導（5月、11月） オ 深谷警察署と連携した交通安全指導（7月） <p>(2) 推進校・地域と連携した取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ア 埼玉県高校1年生自転車安全運転講習会 実施日 4月18日 内 容 危険予測学習、ヘルメット着用の重要性について イ 自転車盗難被害防止モデル校（深谷警察署） 実施日 5月30日 内 容 盗難防止のための自転車鍵の配布 ウ スケアード・ストレイト教育技法による自転車交通安全教育 実施日 10月1日（火） 内 容 模擬交通事故の実演をとおして、交通事故の恐ろしさと危険さを視覚的に理解 <p>エ 高校生の自転車安全運転推進講習会参加者による伝達講習会 実施日 10月1日（火） 内 容 スケアード・ストレイト教育技法の実演の後、自転車安全運転推進講習会参加生徒による伝達講習会を実施</p> <p>3 成果と課題</p> <p>地域連携を含めた本校独自の取組に併せて、学校安全総合支援事業の支援により、生徒の交通安全に対する意識の向上と教職員の交通安全指導に対する機運の醸成をこれまで以上に図ることができた。今後は自転車ヘルメットの更なる普及と、生徒の交通事故件数ゼロが継続した課題である。</p>



自転車ヘルメット着用推進校実施報告書

学校名	埼玉県立幸手桜高等学校
生徒数及び職員数	生徒数 483 人 職員数 52 人
取組の概要	<p>1 交通安全にかかわる学校の概要</p> <p>本校の近隣には中学校や小学校があり、様々な生徒たちの通学路になっている。道路は狭く入り組んだ住宅街であるため、毎朝中学校の職員の方々と幸手市の交通指導員とともに交通安全指導を行っている。</p> <p>生徒の10%が徒歩による通学、30%が自転車通学しており、中には自転車で50分ほどかけて通学している生徒も数名いる。登下校のマナーとして「自転車の二人乗り、並列運転、ヘッドホンやスマホのながら運転の禁止、ヘルメット着用」など、生徒指導心得（生徒手帳）に掲載し、集会等で常に話題に上げて指導している。今年度の交通事故件数は3件であり、幸い軽傷であったが相手の連絡先を確認せずに済ませてしまっているケースばかりであり、事故時は常識としてお互いの連絡先を確認するよう指導している。</p> <p>2 交通安全に関する取組・実践</p> <p>(1) 本校の取り組み</p> <p>ア 春・秋の交通安全指導 (全教員とPTAで駅までの5ヶ所に3日間分担し指導)</p> <p>イ 風紀委員と生徒会の生徒で正門で登校指導。 (整容指導や挨拶運動、ヘルメット推進の声掛けなど)</p> <p>ウ 高校1年生の自転車安全運転講習会 (生徒指導部長が体育館にて実施)</p> <p>エ 各学期の自転車点検</p> <p>(2) 自転車ヘルメット着用推進校としての取り組み</p> <p>ア 模擬交通事故見学 スクエアドストレイト教育技法の実施（12月13日） 幸手市役所を通して交通指導員・近隣の方々に回覧、また保護者全体にお知らせをし参加を募った。当日10名ほど参加。</p> <p>イ ヘルメットの着用啓発活動 貸与していただいたヘルメットを配布・着用啓発</p> <p>ウ 交通安全教室 自転車安全運転推進講習会参加生徒による伝達講習会</p>  <p>3 成果と課題</p> <p>推進校としての取り組みを通して、交通ルールの知識を深めるとともに交通安全に対する意識を高めることができた。自転車は車両であることを常に意識し責任ある行動が取れるように、今後も命の尊さを伝えながら指導を続けていきたい。</p>

高校生の自転車安全運転推進講習会（県内各地区）

■事業の目的

高校生の自転車交通事故防止を推進するため、推進講習を受講した高校生が中心となり、自校生徒に対して自転車安全運転推進に関する取組を実施することにより、高校生の交通安全意識の向上を図る。

※ 令和2年度から4年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、規模を縮小（各校代表生徒1名）して実施していたが、令和5年度から本来の規模（各校代表生徒2名まで）に戻して実施した。

■各地区開催日、会場、参加者

開催日	地区	会場	参加者
令和6年7月26日(金)	北東・北西部	総合教育センター	生徒96名 教員47名
令和6年7月29日(月)	南東部	東武こしがや自動車教習所	生徒63名 教員39名
令和6年8月26日(月)	南西部	セイコーモータースクール	生徒95名 教員52名

※参加者数合計 生徒254名 教職員138名 計392名

■講習内容

○スケアード・ストレイト教育技法による自転車安全教育



〈スタントマンによる交通事故再現の見学〉



〈特定小型原動機付自転車の試乗体験〉

○埼玉県警察本部交通総務課による講義

- ・埼玉県の高校生の自転車交通事故の現状について
- ・道路交通法の改正について
- ・自転車乗用車ヘルメットの着用について

○県民生活部防犯・交通安全課による講義

- ・自転車安全利用新五則について

○東京海上日動火災保険株式会社（県の包括的連携企業）

- ・加害事故責任と賠償保険について

○教育局保健体育課による資料・情報提供

- ・自転車乗車時の心構えや安全点検のポイントについて
- ・自校における伝達講習実施の方法について



〈講義の様子〉

アンケートご協力をお願い

- 研修後に、下記のQRコードからアンケートにご協力ください。このアンケート調査は学校安全の研究・実践に活用するためのもので、皆様の個人情報やプライバシーが明らかになることはありません。
- ご不明な点がございましたら、下記までご連絡ください。

慶應義塾大学 大木聖子：soki@sfc.keio.ac.jp

<https://forms.gle/TieUFXfjkkFvD5IK9>



児童生徒理解・教職員チームビルディング

としての防災訓練

慶應義塾大学 環境情報学部

大木 聖子

安全教育は誰が誰に行うもの？

本来は、組織が労働者に行うもの



教職員には誰が安全教育を？

- 学校保健安全法 第29条
- 学校においては、児童生徒等の安全の確保を図るため、当該学校の実情に応じて、危険等発生時において当該学校の職員がとるべき措置の具体的内容及び手順を定めた対処要領（次項において「危険等発生時対処要領」という。）を作成するものとする。
- 2 校長は、危険等発生時対処要領の職員に対する周知、訓練の実施その他の危険等発生時において職員が適切に対処するために必要な措置を講ずるものとする。
- 3 学校においては、…第10条の規定を準用する。

過去の大地震で起きたこと

- 余震・停電・避難経路の破損・傷病者
- 新耐震基準・耐震化した校舎の倒壊事例はゼロ
- 校庭集合できない → 教室内待機の訓練が不可欠

非構造部材による避難経路の断絶

渡り廊下の崩落
(こうすることで建物を守っているため、渡り廊下やその下は避難経路とはしない、そこに留まらないよう指導。)



強化ガラスかフロートガラスが把握していますか？

避難経路が無事とは限らない / 外壁の崩落・
ガラスの散乱は前提とする

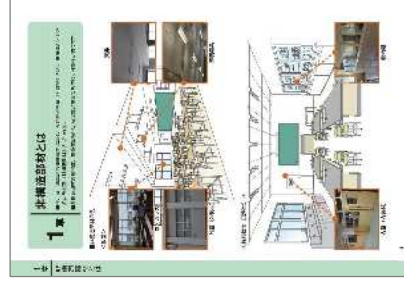
能登半島地震 発生時の揺れ

- MBS News:
 - <https://youtu.be/6nar0ZwHrJc?si=kKVgFFGmSkmQo6BT>
 - <https://youtube.com/shorts/cmDGO2rPwPE?si=dAvzenCjTqOtNemo>
- ANN News:
 - <https://youtu.be/wYMJCErnTOU?si=qpoRXCNCiOMPjIEO>
 - <https://youtu.be/gJgpIQHQCVQ?si=wOkI7MBRrjLHXDmX>
- 日テレNEWS:
 - https://www.youtube.com/watch?v=f8qBm3-u_3o

歩行は不可能 / 立っていることすら困難 / 腰が抜け
てすぐに立てない

非構造部材に注意

- 照明・外壁・内壁・天井・バスケゴール, 等
 - 余震のたびに机の下に素早く入る
 - 外に出る時はヘルメットをかぶる



2016年10月21日（金）14:07 鳥取県中部の地震 鳥取県北栄町の中学校長による手記

窓ガラスが割れたり、壁が落ちたりするよう大きなダメージは認められなかったが、大きな揺れに生徒たちは恐怖心を抱き、パニック状態の生徒の姿も見られた。

地震直後は停電となり、校内放送が使用できなかったため、ハンドマイクを利用して生徒の避難誘導を指示した。指示がなかなか行き届かず、教室内の教師の判断で避難を開始する場面もあった。その日は天候が良かったため、避難訓練通り生徒は外に避難することができたが、荒天時の避難について後日検討する必要があった。

余震が続いたため、なかなか校舎に入ることができず生徒たちの体も冷えてきて、トイレに行きたい生徒、体調に変化がみられる生徒がでてきた。体育館の安全を確認したのち、余震と余震の間を見極めながらクラス単位で、教室棟の荷物を取ったあとと体育館に移動して保護者の迎えを待った。

鳥取県（2016）『鳥取県中部地震記録誌』

阪神・淡路大震災以降、起きていないこと

■ Is値≧0.7 の学校校舎の大破や崩壊は皆無

■ 阪神・淡路大震災後、学校耐震化

■ 99.9%が完了（2024年10月時点）

■ 学校の耐震化：Is値≧0.7

■ 中破のケースすらほとんどない

■ 中破 < 大破 < 崩壊

■ 注意すべきところ：

■ 渡り廊下等の接合部分

■ 非構造部材には特に注意

ランク	被害程度	スケッチ
I	柱・耐力壁・二次梁の損傷が軽微もしくは、ほとんど損傷がないもの。	
II	柱・耐力壁の損傷は軽微であるが、RC二次梁・耐力壁のまわりに、せり出しひびわれが生じられるもの。	
III	柱に軽微なせり出しひびわれ、割けひびわれ、耐力壁にせり出しひびわれが見られ、RC二次梁・耐力壁のまわりに、せり出しひびわれが生じられるもの。	
IV	柱のせり出しひびわれ・割けひびわれによって耐力壁が露出し、傾倒し、耐力壁に大きなせり出しひびわれが生じ、耐力に著しい低下が認められるもの。	
V	柱・耐力壁が大破壊し、建物全体または建物の一部が倒壊に至ったもの。	

過去の災害で起きたこと（被災地教員手記より）

■ 過去の被害地震から調査：

- 恐怖で動けない / 避難途中に昇降口で失神
- 腰が抜けて動けない教職員の発生
- 校庭避難途中に転倒して骨折
- 余震で悲鳴 / 余震で嘔吐 / 余震で校外に逃亡
- 過呼吸 / 過呼吸が伝搬
- 机に頭を激突 / 階段で転倒 / 階段での転倒者が他の人を巻き込み
- 保護者と避難者が校庭に混在 / 校庭で転倒

「自クラスでは何が起こる？」 の問いかけで 全教員体制へ

- 「X月X日、朝の会で地震が起きたら自クラスはどうなるか」を学年で話し合い・学校全体で共有
- 児童生徒指導の観点から、訓練時の事前指導や平時にどのような声掛け・指導が可能か考えて共有

自クラスでは何が起こる？

グループワーク 5-10分

1月平日の朝の会の最中に、震度6強の大きな揺れ！
津波注意報や警報は出ていませんが、余震が立て続いています。
自分のクラスではどんなことが起きそうですか？
自クラスの子供たちの顔と名前を思い浮かべながら、
具体的に挙げてください。

自クラスの発災時リスクは学級運営で最小化

起こりうること

1. 全員机の下には入れると思うが、平時からハイリスクな女児Aは泣き叫ぶ
2. 揺れが収まったからAは私にしがみつき、私もAをトントンしてなだめる
3. 自分もトントンしてほしい児童が一気に机の下から出てきて、私は身動きが取れなくなる

対処方策

- ・ Aが泣き叫ぶのはやむなしだが、ほかの児童を自席にとどまらせることはできそう
- ・ 事前指導の「おかしも」を展開させて、「先生のクラスでは、机の下から小さな声で励ましあうのはOKとします。『大丈夫だよ』『がんばろう』と声を掛け合いましょう」と伝えてみる

自クラスでは何が起こる？

学校安全を安全担当者だけのタスクにしない
全教職員のものとなれば自然に優先順位が上がる
(現実的に地震発生は全員同時に起きる)

生徒指導部会の時間などを活用して全教員で実施
目的は、災害の「自分のこと化」

「安全担当者のやること」ではなく
全教員が、「自分も共にやること」だと認識する機会とする

防災を通して人を育む

■ 防災教育とは

「発災当日にどう対処したらいいか」
の正解を求めめるのではなく、「発災までに、
どうやってたラリスクを下げられるのか」を、
大人も子供も、みんなで探究する活動。
「防災の教育」ではなく「防災を通じた教育」

安全を確保できる場所をもっと知ろう

■ 過去に高確率で起きていること:

- 余震(科学的には100%起きる)
- 停電・校内放送の停止
- けが・人・体調不良者の発生

学校では
起きないこと
になっている

■ 過去に一度も起きていないこと:

- 耐震化された学校の倒壊

起きること
にしている

避難訓練は「校庭に行くことが目的」になっていないか
安全を確保できる場所をもっと知っていく訓練をやろう

発災直後を再現したようす (実動訓練)

大木研の学生が発災直後の児童生徒を演じている。
限定公開の動画でご覧いただけます(校内での共有に留めてください)。



<https://www.youtube.com/watch?v=LuN7EkI2e1g>

実動シミュレーション

- 報告優先順位 (赤→黄→緑) を全員で共有
- 停電時の情報共有方法を訓練のたびに練習
- 情報の集約方法を決めておく
- 引き渡しは同時にはしない, 安否確認終了後

実動訓練の先生方にとっての目的

うまくやることは目的ではない

本当の地震が起きる前に課題を見つけていることが目的

個人としての目標:

- ・ 赤・黄・緑の判断
- ・ 情報共有
- ・ 応急処置
- ・ 声かけの継続

組織としての目標:

- ・ 応援要請・協力
- ・ 全体を俯瞰しての行動
- ・ 声かけの継続
(誰一人取り残さない防災)

実動シミュレーションによって見えた課題

共通して見られた現象:

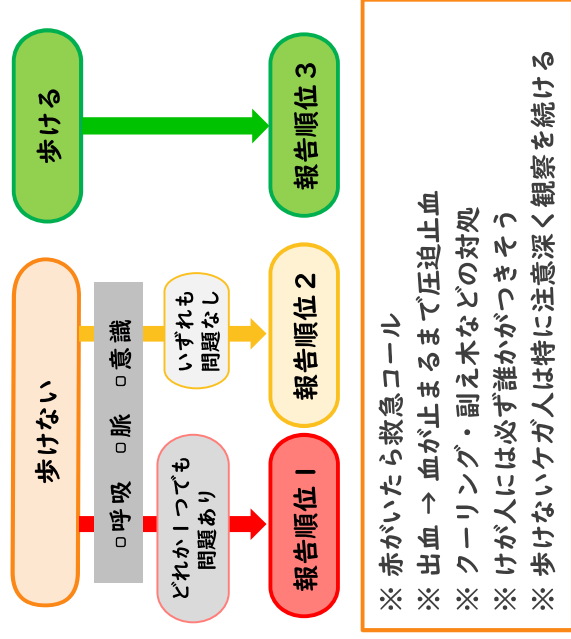
目の前の子供への手厚い対応
⇒ 全体を俯瞰して動くこととの両立が困難

- ① 保健室がパンク状態
→ 保健室への搬送順位を作成
- ② 保護者・避難者への対応が滞る
→ 保護者への引き渡し訓練と周知
- ③ 停電時の情報共有が困難
→ 情報共有の仕方を検討、
何度もやって改善サイクル
を生み出す (本来の訓練の目的)

・ けが人の情報
・ 保健室の状況
・ 担架の位置
・ 本部への伝達、など

(日向恵里名, 2022; 大倉加子, 2024)

けが人の見極めと報告順位



(吉田茜, 2023)

訓練の事前指導

- 教室内待機の周知
 - 学校校舎は倒壊しないことを伝える
 - 電灯や内壁が落ちる可能性があるので、机の下に入ることを伝える
- 大地震のときは、必ず余震が立て続くことを伝える
 - 余震のたびに机の下に入れば大丈夫
 - 余震が何回になるかは誰もわからない
- 緊急地震速報の報知音は、嫌な気持ちになるように作ってある。怖いけど、みんなを守るための音。
- 抜き打ち訓練にこだわらない。意義のある事前指導をする。

「抜き打ち」よりも、充実した事前指導を

■ 訓練の事前指導：

- 拳がったリスクを少しでも下げるために必要なコミュニケーションを、子供たちと取る時間

■ 写真で危険探し授業・

地震シヨート訓練

- 「大地震にも自ら対処できる!」という自己有用感をもたらせる教材



(1) 余震が何度か起きる

余震が発生する訓練を行い、教室内で点呼して終了

1. 事前指導
2. 本震を示す緊急地震速報の報知音を鳴らす
3. 余震を示す緊急地震速報の報知音を数回鳴らす
 - ・教職員同士は、何回鳴らすかあらかじめ示し合わせてOK
4. 児童生徒は報知音のたびに机の下に入る
5. 校庭に集合せずに、教室内で点呼をして終了
 - ・管理職が集計に来る／学年で廊下で集計する, など

※ 教員の声掛けの例：

- ・「ケガしている人はいませんか」「周りの人も大丈夫ですか」
- ・「余震来たらまた机の下に入ってくださいね」

避難訓練の改善事例

基本編：教室内待機のまま情報共有

- (1) 余震が何度か起きる
- (2) 停電していて放送設備が使えない

応用編：けが人が出た場合の動き方

- (3) 「けが人封筒訓練（けが人演技なし）」
- (4) 「けが人封筒訓練（けが人演技あり）」

(2) 停電して放送設備が使えない

本震や余震の後、他クラスの先生と安否確認

1. 事前指導

- ・ 停電想定なので先生たちは廊下で大声で安否確認する旨を伝えておく
 - ・ 他クラスに助けに行くこともあるが、担任不在でも余震の時には机の下に入るように伝える
2. 本震・余震を示す緊急地震速報の報知音を鳴らす
 3. 廊下に出て「〇年〇組, 無事です!」など情報共有する
 4. 安否情報を本部に伝える
 - ・ 管理職が集計に来る／学年で廊下で集計する／その場でどの先生が行くかを合議して本部に伝えに行く, など

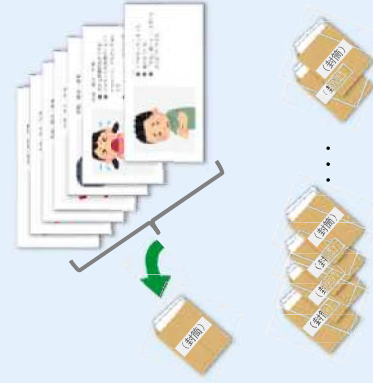
具体的な訓練改善事例 (応用編)

- けが人を想定した情報共有訓練
- けが人への声かけを導入した全校訓練

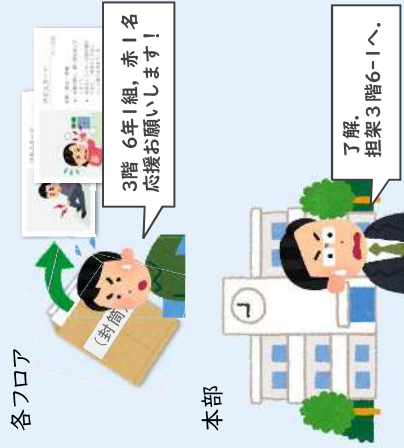
(3) 封筒訓練 (けが人想定訓練)

けが人が出た場合の情報共有・報告順位を練習

クラスの数だけ封筒を用意



フロア・本部と情報共有



避難訓練の改善事例

基本編：教室内待機のまま情報共有

- (1) 余震が何度か起きる
- (2) 停電していて放送設備が使えない

応用編：けが人が出た場合の動き方

- (3) 「けが人封筒訓練 (けが人演技なし)」
- (4) 「けが人封筒訓練 (けが人演技あり)」

(3) & (4) 封筒訓練 (けが人想定訓練)

けが人が出た場合の情報共有・報告順位を練習

1. 事前指導

- ・ 封筒の中に、架空のクラスメイトが入っていて、ケガをしていることを伝える
- ・ 重症者だった場合は、先生は保健室に行くことを伝える

2. 本震・余震を示す緊急地震速報の報知音を鳴らす

3. 開封して重症度を確認, 廊下で他クラスに情報共有する

4. 安否情報を本部に伝える

- ・ 管理職が集計に来る／学年で廊下で集計する／その場でどの先生が行くかを合議して本部に伝えに行く, など

川越市立霞ヶ関西小学校：けが人ありの全校訓練

日テレNEWS『命を守るシン避難訓練』



07NEWS

トップ 放送 録画 配信 動画 再生

特報 2023年5月3日 火曜日

校園に避難するだけじゃない！ より断しく、より進化し続けている超実践的な「シン避難訓練」とは？

命を守るシン避難訓練

生徒の感想：6つの概念的カテゴリー

佐藤（2008）による質的データ分析法によって概念的カテゴリーを抽出

概念的カテゴリー	記述例
災害を想像	・今回はケガが人役をしましたが、自分がケガをしたらどんな風に先生に伝えたらいいとか家路はどのように対応されるのかを考えて行動する事ができました。実際にそんな事がおきたら訓練のように行動したいです。
訓練での学び	・どのようにならなければいいのかが分かった。 ・大きな地震だと、先生たちはかぎられたんかたてたかんからあまり助けることができなかった。もし本当のじしんがあったらやばい事もおきるかもしれないと思った。そして上の物が落ちてきたらやばいと思った。 ・しっかりと協力することで早くケガの人などを避難したり、より効率的に状況を把握できるのだとわかりました。
実践	・危ない場所をあらかじめ見て、どの様に自分を守ればいいのか見つける事ができた。 ・先生だけじゃやてできないとき、自分も動いたほうがいいということがわかった。 ・大きな地震が起きて、友達やケガをしたとき、自分ができていることを考えようと思った。
意欲	・先生の黒い帽子がじゃまかかんみえた部分もありました。ですがクラスの人も集中して ・今回の訓練では、自分達が教室にいる時に、ケガ人がたてた場合の対応を知ることができたが、階段や廊下にいる時やそこでケガ人がたてて、先生が周りにいない時の対応を覚えておきたい。
新たな訓練	・今回はいつもの訓練とちがって何度も地震があったり、けが人もたくさん出たので、臨場感がでました。また僕は、伝える人だったので、大変でした。 ・やったことのないタイプの避難訓練で、自分から知らないこともあったけど、良い経験だと思う。小学生でも、これなら嫌がらずに訓練を行いたいそうと感じた。 ・訓練した事以外の予そくできないことと聞いた。
訓練で生じた感情	・何回も地震がきて、本当に地震が起きたら、もっと余震が起きるのかもしれない不安になったが、今、そのことを考えることができてよかったと思う。本当におきた時にも、余震に対して冷静に対処していきたい。 ・クラスメイトがけがをしたのに気が付くことができなかったの悔しい。 ・緊張して、自分ができることがなかったため、少し悔しく感じた。 ・先生方が、しんけんに取り組んでいる姿を見て、私達も真剣に取り組もうという気持ちで訓練できたと思います。

中央区立晴海中学校にて：

「なぜ子供たちにも赤黄緑を教えたのですか？」

「（休み時間想定の実動訓練を教員がやってみて）何が衝撃だったかって、教室にたどり着けない、っていうことです。生徒が階段でうずくまっています。そしたら教員は止まるんですよ、無視できないんです。

でも、今ならできる。状況を聞いて、『あとで必ず戻ってくるからね。上に赤の人がいないか先に見てくるね。必ず戻ってくるからね』って言い残して、その場を去れる。生徒も理解できる。自分は黄色だから、緑だから、赤の人が優先って。

だから、教員だけじゃなくて、生徒にも、あの赤・黄・緑を教える意義があるんです」

概念的カテゴリーのストーリー化

生徒は、余震や停電、傷病者が出る訓練を、今までになかった「新たな訓練」と認識し、具体的に「災害を想像」し、「訓練での学び」を得た。そして、訓練の中での「実践」を通して、新たな学習や改善の「意欲」や「不安や悔しいなどの感情」を抱いた。

令和6年度「学校安全総合支援事業」埼玉県推進委員会委員及びアドバイザー等一覧

【アドバイザー】

埼玉県立大学非常勤講師兼日本女子大学非常勤講師	高橋 宏至
慶應義塾大学環境情報学部地震災害研究室准教授	大木 聖子
県警察本部交通部交通総務課課長補佐	芝間 裕史
県警察本部生活安全部生活安全総務課課長補佐	弘田 耕平
気象庁熊谷地方気象台調査官	山城 幸浩
気象庁熊谷地方気象台地震津波防災官	山下 芳晴
気象庁熊谷地方気象台気象情報官	入福 敏行

【委員】

公益財団法人埼玉県消防協会次長	木村 昌明
気象庁熊谷地方気象台次長	渡辺 記秀
県教育局県立学校部保健体育課長	荻原 篤大
埼玉県安全教育研究協議会会長（八潮市立八潮中学校長）	土谷 昌秋
埼玉県高等学校安全教育研究会会長（県立熊谷商業高等学校長）	竹越 利之
県教育局南部教育事務所教育支援担当指導主事	熊田 大樹
県教育局西部教育事務所教育支援担当指導主事	伊藤 将瑛
県教育局北部教育事務所教育支援担当指導主事	小林 良
県教育局北部教育事務所秩父支所教育支援担当指導主事	横山 祐樹
県教育局東部教育事務所教育支援担当指導主事	堀江亨一郎
戸田市教育委員会主幹兼主任指導主事	水沼 美和
鶴ヶ島市教育委員会指導主事	梅舘 雅敏
吉川市教育委員会副主幹	楠 聖次郎
県立浦和東高等学校長	遠井 学
県立深谷商業高等学校長	新井 秀明
県立幸手桜高等学校長	矢島 誠
県危機管理防災部危機管理課普及啓発担当主幹	山崎 修

【事務局】

県教育局県立学校部保健体育課教育指導幹	大松 武晴
県教育局県立学校部保健体育課健康教育・学校安全担当主任指導主事	薬師寺將二
県教育局県立学校部保健体育課健康教育・学校安全担当指導主事	阿久津広真
県教育局県立学校部保健体育課健康教育・学校安全担当指導主事	山田 朗
県教育局県立学校部保健体育課健康教育・学校安全担当主事	金井 孝太



埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっち」